

垂水史談会報

第64号
2025(令和7年)
3月発行

【報告】

—戦後80年—

「第六垂水丸遭難事故を語り継ぐ」

講演会

二月二十二日、垂水市立図書館にて、「第六垂水丸遭難とその時代」と題して講演会を開きました。垂水史談会では毎年二月に第六垂水丸遭難に関わる写真や資料の展示を行なってきました。この日の講演会は、今年を取り組みの大きな目玉となるイベントでした。

開会の十時前から続々と参加者が集まり、狭い会場の椅子が足りなくなるほどの盛況ぶりです、およそ四十名の皆さんに貴重なお話を聞いていただくことができました。

前半は、鹿児島市の山下春美さんに第六垂水丸遭難事故の原因と時代背景についてお話しいただきました。



山下さんの講演概略

この事故は、定員340人に対し二倍を超える700人に乗せ出港したために起こったことでした。定員超過の理由としては、①戦争のために国が民間の船会社から船を徴用したため、船が少なくなり、通常鹿児島―垂水間を14往復していた定期船が4往復しかできなくなった。

②日曜日で、大隅半島から鹿児島へ病院受診や遊びで出かける人が多かった。

③次の日が鹿児島市の部隊の戦地へ向けた兵士たちの出発日で最後の面会日あたり、多くの家族連れが鹿児島市内に行こうとしていた。

などが考えられます。そして、極端な定員超過で出発を躊躇していた船長へ向けて軍人が、「出港しろ。」と軍刀で脅し出港させたこともよく知られた話です。

しかし、大変悲惨な事故であったにも関わらず、戦中・戦後にわたって、第六垂水丸の遭難について、地元の垂水でも詳しい話が公に語られることはありませんでした。遺族会が発足したのは、事故後33年も経ってからでした。長い間事故が伝承されてこなかったのは、「出来事を語るには一定の距離が必要だが、事故は町全体が当事者となり、あまりにも

距離が近すぎた。町中の家に忌中の札が貼られ、話す雰囲気ではなかった。」と東海大学の水島久光教授は、2009年の南日本新聞紙上で語っています。つまり、軍部などからの強制力だけでなく、体験を家族にさえ語っていないケースなど、住民側にも抑制が働いていたのです。

第六垂水丸は、爆撃されたり撃沈されたりしたわけではありませんが、国民生活が、規制、統制、動員、供出など「すべては戦争のため」という時代であり、遭難の根本原因として「戦争のため」と考えるべきでしょう。

講演を聞いて、第六垂水丸の遭難が、戦時下という非常事態が生み出した悲劇だったことを再確認しました。戦闘はなくても、戦争は国民を苦しめ縛り付けてしまうのです。また、水島久光教授の言葉から、第六垂水丸遭難の事実の継承ができてくかった理由も納得できました。別の方から、生存者が、生き残ったことを申し訳なく思ってしまうような空気もあったと聞きます。

後半は、第六垂水丸の大惨事から生還した鹿屋市在住の田尻正彦さんの体験談を聞きました。

この日の乗客は、出征する兵士に最後の面会にいくための若い母親と幼い子どもや兵士の親である老人たちといった人たちが多かったそうです。乗船は、老人や女性が先で、その人たちは船室に入りました。十九歳だった田尻さんは、若かったので一番最後に乗船させられたため、船室には入れず、船の最後部の甲板の左舷の一番端に乗ることになりました。棧橋から離れ鹿児島市に向けて方向転換しようとした船は、バランスを崩し、左側に傾きやがてひっくり返りました。甲板の左端にいた田尻さんは真っ先に海に投げ出されました。「船の右側から人が落ちてきて、取っ組みかただった。」「すぐに海に落ちて泳ぎ出したことが不幸中の幸いだった。後から落ちてきた人たちにつかまったり引つ張られたりしなかったことが助かった要因の一つだと思う。」「浜に上がると町のサイレンは鳴りっぱなしだった。」「砂浜には死んだ人が三十人ぐらい並んでいた。」「海軍さんが救助された人に人工呼吸をしていた。」「暖がとれるように婦人会や青年団がいくつもたき火を用意していた。」など、当時の情景がリアルにうかぶような生々しい話で、鳥肌が立ちました。会場の人たちも食い入るように聞き入っていました。貴重な体験を聞かせていただき、充実した時間でした。

講演後の意見交換の中で、船長さんの甥の森山稔さんが、事故の後のおじさんの苦悩を涙をうかべながら語られ、胸をうたれました。船長さんも戦時下という時代状況の中で運命を翻弄されてしまったのだと気の毒に思います。

垂水市民の中でもこの事件の詳細が十分に伝わっていない現実ですが、長年にわたって、展示や講演会を続けてきたことが今回の熱気あふれる講演会に繋がったと思います。地元の歴史の大切な教訓として今後も継承していきたいといけません。



はないでしょうか。

〈参加者の感想から〉

○今回は、体験者の貴重なお話で、リアルでもとてもよかったです。○第六垂水丸の102才の生存者が来られていてびっくりしました。語り継ぐことは大切ですね。補償問題はなかったのでしょうか？

○おばから、事故があったことは聞いていましたが、詳細は知りませんでした。体験者、船長の親族の方の話を聞けて胸があつくなりました。伝えていくことの大事さも感じました。

○垂水丸のことで知らなかったことはもとより、当時の戦況や民衆の心理まで言及されており、非常に学びとなりました。歴史を鏡とした今の我々の生き方が問われていることを思わされました。体験談として聞く垂水丸の話は、単なる過去の済んだ話ではなく、その方の苦悩や悲しみの声として聞こえてきて、大変重いものでした。今回の講演会で、これを伝えていくこと、できたことも、そしてそれを受け取った人がいることも、誠に意義深いことと思いました。

○日本に限らないが、昔も今も人命尊重をうたいながら安全管理のための遵守すべき条項をおろそかにして犠牲となる人びとが少なからず生じる。一人一人が自分と家族の安全のために努力を惜しんではならないと思います。

○展示を見て、語り続けていくことの大切さを感じることでできる展示だと思いました。鹿屋から生存者の田尻さんが来てくださったのも、約一ヶ月間展示されていたからだと思いました。戦争が始まれば勝たねばならない空気になるのは、今も変わらないのではないかと思いました。だからこそ、戦争を問題解決の手段として選ばせない世論をつくり続けることが必要だと思います。

(古場昌彦)

田尻正彦さんの証言 ①

(大正13年3月30日生まれ 鹿屋市在住・鹿児島市育ち)
《令和7(2025)年2月14日、22日聞き書き》

私は100歳を超えた。垂水丸の事故の時は19歳だった。勤めていた海軍鹿屋工廠が日曜日で休みだったので、鹿児島に早く亡くなった母親の墓参りに行くため、北田からバスに乗った。

当時は木炭車で、垂水への行きはいいが、帰りは古江の急坂では私たち乗客はバスを押していたものだ。その日、北田から乗ったバスは満員で、私は座れずに、運転手の横に立っていた。出発して、運転手が足もとの弁当を取ろうとしてハンドルを取られ、バスが側溝に落ちかけた。

私があっ！と声を上げたら、運転手が気付きバスは落ちずに済んだ。バスに乗った人たちは皆垂水丸に乗る人たちで、全員亡くな



っただろうが、私が声を上げなければ、バスは側溝に落ちてしまいい、あのバスの乗客は船に間に合わずに死なないで済んだのにと
思うと、時折涙が出る。

船着き場は45連隊が明日鹿児島を出征するので最後の面会に行く人でいっぱいだった。若い母親は夫に会うために子供を背負い、一張羅を着ておめかしして、親たちも重箱にいっぱい御馳走を下げていた。とても寒い日でトタン張りの切符売り場の陰にみんなが風をよけていた。乗船は老人や女子供を先に乗せたので、その人たちは船内に入った。私は一番最後に乗ったので、船底の船室に入ろうとしても満員で入れずに、船の最後部の甲板の左舷の一番端に乗った。甲板も満員だった。定員オーバーしても誰も乗船を止めることはなかった。700人くらい乗ったということだ。転覆は想定もしていなかっただろう。出港時は船はまっすぐ浮いていた。垂水は砂浜だったので200m位海の方へ突き出した棧橋だった。船は船首を垂水に向けて棧橋に停泊しており、出港は、いつも鹿児島島に向けてまずバックをして、それから前進をするために方向転換をする。

その日は方向転換をしたら、私が乗ってる左舷を下にして右舷を上に向けてきて、私の側の下の乗客は足が海水に洗われ始めたものだから、濡れないように足を交互に持ちあげていたのが見えた。さらにどんどん傾いてきて、乗客の膝まで海水につかっているのが見え、しまいには反対側の右舷が高く持ち上がってしまい、上になった右舷の甲板からはたくさんの人たちが滑り落ちてきたので、甲板には手すりもなく、その人達に押しとぼされて私が真っ先に海に投げ込まれてしまった。

—以下次号—

【聞き書き…小手川清隆(大隅史談会理事)】

【研究ノート】

「境」を探る

国立公文書館デジタルアーカイブというサイトで、『元禄國絵図』というものが公開されており、誰でも自由に閲覧することができます。『元禄國絵図』は、その名のとおり元禄十年(一六九七年)に作成された國絵図であり、「大隅國」「薩摩國」などの絵図を調べることができます。

『元禄國絵図』によれば、垂水市の中央部分は「大隅国大隅郡」に属していたことがわかります。しかしよくみると、北は「牛根村」と書いてあるあたりから、南は「椋原」と書いてあるあたりから、郡の境線が引かれています。江戸時代、境は「曾於郡」であり、新城は「肝属郡」であったのです。

ここで、「境村」という名称が文字通り曾於郡と大隅郡の境目に位置していることに気づかれます。『垂水市史』によれば、「境」という地名の由来は「砂瀉(サツガイ)」が語源であると考えられています。既に市史でも指摘されているとおり、単に音の当て字であれば「坂井」でも「堺」でも「作開」でもよかったです。この「境」としたのは、字義に有意な由来があったのではとも考えることができます。

地域の範囲は、当然ながら時代によって細かく変動します。特に元禄よりさらにさかのぼる古代期(主に飛鳥・奈良時代)のころは、絵図も出展によって微妙に異なったりしています。しかし、山や川などの地形はそう簡単には変わりません。錦江湾の後背に高隅山がそびえる垂水市においては、主要な道や集落の位置は昔からそう変わらないのではないのでしょうか。そして古代から境界であった場所には、交易所や関所としての役割もあつた可能性があります。文献ではハッキリしないことを探るための、発掘調査が待たれます。

(高嶺光佑)